

知的障害特別支援学校に在籍する生徒を対象とした 他者の指示に基づく行為の遂行に関する事例的研究

石川 緑里

I 問題

他者からの指示を理解し、それを遂行できることは、学校生活や社会生活において求められる重要な力の一つである。しかし、知的障害者では、この指示に基づく行為の遂行に困難を示すことが指摘されている。知的障害者の課題遂行の特徴を調べた研究は、精神年齢が低い場合、プロセスの弱さがみられることを指摘している。例えば田坂・伊藤（2010）は、知的障害者が課題解決において支援者のモデルに依存する傾向が強いことから、プランニングの弱さを指摘している。この点については、渡邊（2008）もまた、課題全体を捉えたプランニングに困難があると指摘している。

こういった困難に対する支援手立ては、支援者のかかわり方や環境整備という観点から多く検討されている。支援手立ての決定は、対象生徒の見られた行動を基に行われていたが、支援に必要な条件の心理機能に着目して十分に行われてきたとは言いがたい。よって、支援手立てを考察するうえで、対象生徒の行為について、心理機能の面から分析することが必要だと考える。

II 目的

本研究は、知的障害特別支援学校に在籍する生徒を対象として、他者からの指示に基づく行為の遂行について、行為の遂行過程に注目して分析し、行為の遂行の向上につながる支援手立てを考察する。

III 研究 1

研究 1 は、知的障害特別支援学校に在籍する生徒を対象として、他者からの指示に基づく行為の遂行状況を把握し、必要な支援を考察する上で必要な観点を検討することを目的とした。

1 対象生徒

知的障害特別支援学校高等部に在籍する 1、2 年生の生徒を対象とした。

2 手続き

作業学習の時間を中心に、非交流観察によって生徒の様子を記録した。観察は、X - 1 年 11 月中旬から X 年 3 月までに 9 回実施した。

3 結果

教師から出された指示に基づいて作業を進めていくことが十分にできていないとみられる場面が観察されたが、その状態は多様であった。研究 2 では、保護者から研究協力の許可を得ることのできた 2 名の生徒を対象として、指示に基づく行為の遂行の特徴を分析し、遂行のつまずきに対する支援の手立てを考察する。

4 行為遂行の分析に必要な観点

行為を目標にそって方向づける力については、近年、実行機能の点から論じられることが多い。実行機能とは、目標到達のために意識的に行動を制御する心理機能である（森口, 2012）。一般に、実行機能の下位機能として「抑制」、「切替え（シフティング）」、「更新（アップデューティング）」という 3 つ（Miyake et al., 2000）が想定されている。知的障害を伴う発達障害児を対象として実行機能の経年変化を検討した浮穴（2008）は、精神年齢の高さにかかわらず、切替えと抑制に困難を示す場合があることを報告している。また、指示に基づく行為の遂行には相手とのコミュニケーションの状態が反映されるが、言語発達の遅れや他者の表情認知の困難など、知的障害者にはコミュニケーションに係わる問題を有していることが知られている。そこで研究 2 では、実行機能と他者とのコミュニケーションの観点から行為の遂行の特徴を分析し、特徴に応じた必要な支援を検討することを目的とする。

IV 研究 2

1 対象生徒

知的障害特別支援学校高等部 3 年生に在籍する

A さん、B さんの 2 名を対象とした。

2 手続き

作業学習の時間を中心に、教師からの指示に基づく行為の遂行状況を非交流観察によって記録した。X 年 6 月下旬から X 年 11 月上旬にかけて、計 11 回の観察を行った。

コミュニケーションに関しては、まず①教師とのやり取りの様子から特徴的な点を抽出した。加えて、②広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度 (PARS) による評価を行った。また、他者とのコミュニケーションの基礎には、相手が発する社会的刺激の一つである視線に敏感に反応できることが考えられるため、③コンピュータ画面に現れるターゲット検出に対する、人の視線の影響の程度を測定した (Senju et al., 2004)。

3 結果

1) 対象生徒 A さん

(1) 行為の遂行の特徴

A さんは、作業学習において木板の水磨きを主に行った。作業に必要な運動機能の問題があるわけではなく、教師から口頭で指示された箇所を磨くこと自体には困難がみられなかった。しかし A さんは、周囲にある物や他者の行動等、行うべき作業内容とは直接関係しない事柄に行動が逸れてしまうことがみられ、最終的な目標に向けて作業を続けることに困難を示す様子が多く観察された。

また A さんには、指示や作業経過の確認を教師に対して何度行うといった様子が見られ、作業が途中で中断してしまうことがよく見られた。

しかし、作業中の A さんに対して、教師が「できてるよ」などの声掛けを適時行った場合、作業の中断や注意の逸脱がなく、集中して作業に取り組むことができていた。

(2) コミュニケーションに関する特徴

PARS の結果、広汎性発達障害傾向の可能性は低かった。また、他者からの社会的刺激 (視線) にひきつけられる傾向は弱かった。

2) 対象生徒 B さん

(1) 行為の遂行の傾向

B さんは、手芸班で主にピエロの人形の制作を

行った。B さんもまた、運動機能に著しい問題はなく、人形作成に必要な工程の遂行に困難は見られなかった。見本の人形が用意されている場合は、自ら作った物と比較しながら作業の見直しを行うことができていた。しかし見本が用意されていない場合、作業が一通りでできており、作った人形の仕上がり自分でチェックすることはできているにも係わらず、人形に入れる綿の量が足りないこと、パーツの縫い付けが緩いことをよく指摘されていた。

また B さんは、作業から掃除や休憩への移行等、活動の切替えをスムーズに行えないときがあった。このような傾向は、活動の切替えを伝える声掛けが全体に対して行われた場合に見られやすかったが、教師から個別に声掛けがあった場合は切替えがスムーズにできることもあった。

(2) 他者への注目の傾向

PARS の結果、広汎性発達障害傾向の可能性は低かった。社会的刺激にひきつけられるという傾向はあったが、他者からの社会的刺激 (視線) に特に強くひきつけられるという明確な傾向は見られなかった。

4 考察

1) A さんに必要な支援

(1) 行動の逸脱に対する支援

A さんは、作業と直接関係のない人、事柄に注意が逸れてしまいやすい傾向がみられた。こういったことの背景として、他者からの社会的刺激に引きつけられる傾向が弱かったことから、作業前の指示を聞いて保持することに弱さがあり、その結果、作業から注意が逸れ易くなっているといったことが考えられる。こういった事に対しては、指示内容の確認を十分に行うこと、教師から適時、注意を作業に集中させる声掛けを行うといったことが支援として考えられる。

(2) 行動の自己評価に対する支援

A さんには、作業を中断して教師に作業経過を何度もチェックしてもらおうという行動がみられた。こういった場合、作業は何度か中断されるが、注意自体は作業そのものに向けられ続けている。こ

のような場合、A さんにとっての困難は自分の行った事がどれだけ目標に近づいているかを自己評価することとみることができる。教師が、作業の進み具合に関する声掛けを適時行っていた場合には作業の中断がみられなかったことから、作業経過について随時フィードバックを与えることが、このような問題に対する支援の一つになりうると考えられる。また、作業の進み具合を目標と関連づけてより具体的に把握できるよう、随時参照できる視覚的な見本を提示すること等も支援の一つになりうるであろう。

2) B さんに必要な支援

(1) 行動の自己評価に対する支援

B さんは、見直しを含め、必要な作業工程を逸脱することなく一人で進めることができていた。しかし、作品の見本がない場合には、作業の見直しはしていても、チェックが甘くなってしまう様子がみられた。見本がなくても見直しを行っていたことから、B さんには作業に必要な行程が内的に保持されていると考えられた。しかし B さんには、他者の発する社会的刺激にひきつけられる傾向が弱いという様子がみられたため、作業に関して与えられた指示が行動を調整する上で十分に機能しないといったことが考えられる。見本が用意された際には作業のチェックが十分に行えていたことから、口頭での指示に加えて視覚情報による目標状態の提示を行うといった事が支援として必要であると推測される。

(2) 行動の切替えに対する支援

B さんには、作業から掃除へとといったような活動の切替えがスムーズに行えないことがあった。ただし、行動の切替えに関する指示が教室全体に対してではなく、B さん個人に向けられた場合は、行動の切替えが出来ていた。これは、作業に対する集中の深さが行動の切替えの困難の原因である可能性を示唆しており、行動を切替えるきっかけがより明瞭に伝わるように工夫することが支援の一つになりうると考えられる。

V 今後の課題

本研究では、知的障害特別支援学校に在籍する

生徒の指示に基づく行為の遂行の特徴の分析、および遂行上の困難に対する支援を考察した。本研究では、特に実行機能と他者とのコミュニケーションの状態に着目した検討を行った。しかし、本研究では、行為の遂行特性の分析結果とそれに応じた支援手立ての妥当性を検証することができなかった。今後の研究においては、考えられた支援手立てを実践し、その妥当性を確認していくことが必要である。

文献

- Miyake, A., Friedman, N. P., Emerson, M. J., Witzki, & Howerter, A. (2000) The unity and diversity of executive functions and their contributions to complex “frontal lobe” tasks: A latent variable analysis. *Cognitive Psychology*, 41, 49-100.
- 森口佑介 (2012) わたしを律するわたし：子どもの抑制機能の発達. 京都大学学術出版会.
- Senju, A., Tojo, Y., Dairoku, H., & Hasegawa, T. (2004) Reflexive orienting in response to eye gaze and an arrow in children with and without autism. *Journal of Child Psychiatry*, 45(3), 445-458.
- 田坂裕子・伊藤良子 (2010) 広汎性発達障害児の構成課題解決における遂行 - 知的障害児および健常児との比較 - . 東京学芸大学紀要 (総合教育科学系Ⅱ) , 61, 85-96.
- 浮穴寿香・橋本創一・出口利定 (2008) 知的障害を伴う発達障害児の実行機能の特徴 - ルール切り替えを含む課題を用いた経年的視点からの検討. 東京学芸大学紀要 (総合教育科学系) , 59, 183-189.
- 渡邊雅俊 (2008) 構造化されていない問題における知的障害児のプランニングに関する研究. 特殊教育学研究, 46(3), 149-161.